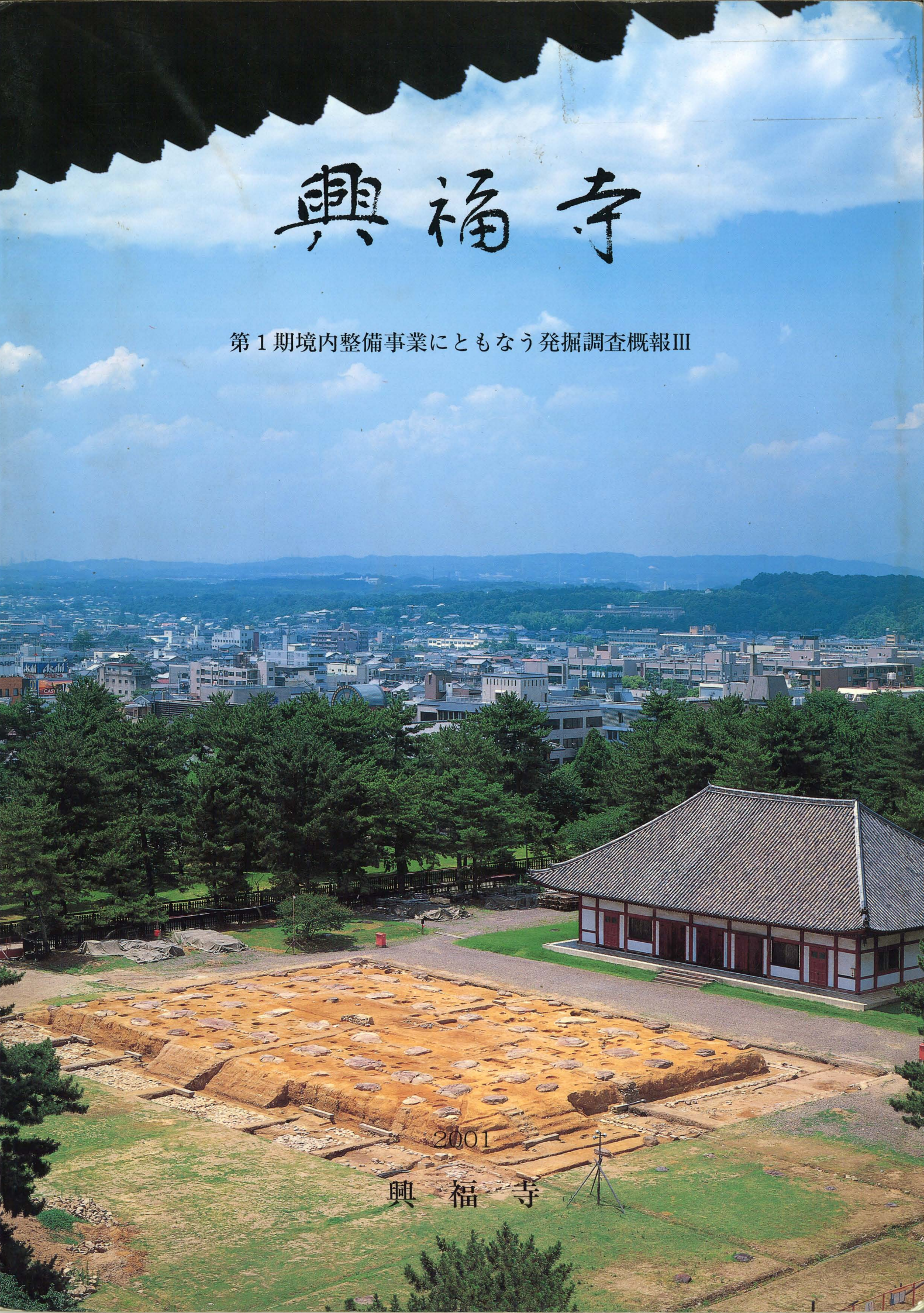
興福寺

第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅲ



2001

興福寺

調査区全景（北西より）

調査区全景（南東より）

創建期鎮壇具に関わる遺物

序

興福寺では、平成10年度から同19年度までの10年間を境内整備事業の第１期とし、現在、伽藍中央部の整備に取組みつつある。もとより、それは、精緻な発掘調査の結果をふまえたものでなければならないから、自ずから調査期間も長くなってくる。

しかし、それだけに、数々の貴重な知見を見いだしていることは、既刊の「第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ｉ」「同II」によって理解される通りである。

それにつづくこの「同概報III」では、平成12・13年度に行われた中金堂基壇全面とその周辺にかかわる調査結果を報告するものである。中門西半部分と同様、地山削りだし工法によって造成された創建期基壇の全容、あるいは、その外周の雨落溝が明らかになったことなどは、今後の基壇整備にとって重要であろう。

そして、これらの発掘調査およびその結果が、享保２年（１７１７）に失われて久しい中金堂復原への貴重な一歩であることを、大きく記憶に留めたいと思う。

この発掘調査も、奈良文化財研究所によって鋭意実施された。ここに、深く謝意を表するものである。

平成14年３月

興福寺貫首　多 川 俊 映

目　　次

序
目　　次
1　調 査 経 過　3
2　中金堂の歴史　4
3　中金堂の建築　6
4　遺　　構　8
4－1　中　金　堂　8
4－2　北 面 回 廊　22
4－3　中金堂周辺の遺構　22
5　遺　　物　24
5－1　瓦　24
5－2　土器・陶磁器　26
5－3　金属製品・石製品・ガラス製品その他　28
6　結　　語　30
6－1　主要な調査成果　30
6－2　考 察 と 課 題　31
報 告 書 抄 録　32

例　　言

1．本書は興福寺第１期境内整備事業にともなう平成12・13年度発掘調査概要報告書である。

2．調査は興福寺の委託を受けた奈良文化財研究所（奈良国立文化財研究所）平城宮跡発掘調査部が、平成13年１月９日から平成13年10月３日にかけて実施した。

3．調査は、川越俊一・舘野和己・次山淳・内田和伸・西山和宏・清水重敦・豊島直博・馬場基・渡辺丈彦・市大樹が担当し、安村健（帝塚山大学大学院）・矢倉嘉人（帝塚山大学）・金倫廷（京都橘女子大学）が参加した。また、石材の鑑定は肥塚隆保・高妻洋成があたった。

4．調査並びに本書の編集にあたっては、奈良県教育委員会・奈良市教育委員会の協力を得た。

5．本調査は、平城宮跡発掘調査部の第325次調査として実施したもので、各遺構には平城京左京における調査基準に従い一連の番号を付した。発掘遺構図等の座標値は、国土方眼第Ⅵ座標系による。

6．本書の作成は、当調査部長・金子裕之の指導のもと調査員全員があたり、全体の討議をへて行った。各項の執筆分担は以下の通りである。

　3　清水重敦、４－１（９）・５－３　次山淳、５－１　渡辺丈彦、５－２　川越俊一、
　１・２・４－１（１）～（８）・４－２・４－３・６　馬場基

編集は馬場基が行った。遺構・遺物の写真は、牛嶋茂・中村一郎・杉本和樹が撮影した。

1　調査経過

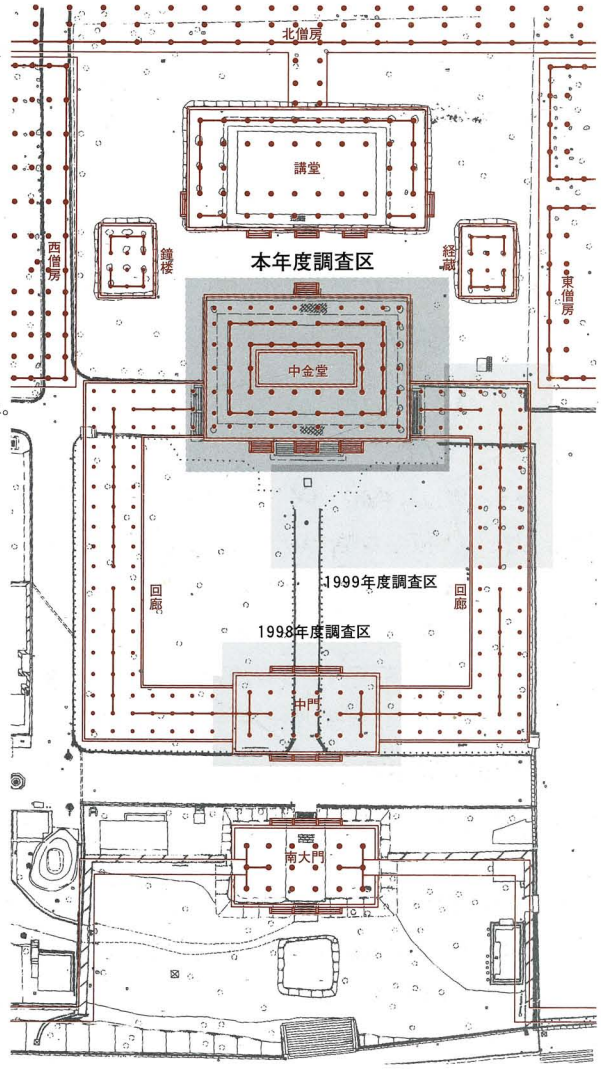
本調査は、平成10年度の中門、11年度の東面回廊等に続き、興福寺第１期境内整備事業の第３・４年次にあたる。調査区は、中金堂基壇を中心とする東西51ｍ・南北36ｍ、調査面積は1836㎡である。調査区内には中金堂基壇・北面回廊・中金堂前庭部等が含まれる。

平成12年秋までは、中金堂基壇上には文政再建中金堂（通称「赤堂」）が建ち、礎石も残されていた。既往の研究では、これらの礎石や、興福寺の建物が古い形態を踏襲するという一般的傾向、絵画資料・近世の実測図等を元に建物の検討をしているが、礎石が原位置を保つ根拠は必ずしも十分ではなく、絵画資料も直接は創建期まで遡り得ない。今回の調査では、中金堂創建期の様相とその後の変遷の解明が重要な課題となった。また明治初頭に出土し、現在東京国立博物館・興福寺に分かれて蔵される国宝・興福寺中金堂鎮壇具は、当時の記録からは埋納形態等が判然とせず、この点についても知見を得ることが期待された。

赤堂は、平成12年５月～８月に解体された。12月には、調査員立会のもと階段踏石・基壇化粧等の取り外しが行われた。平成13年１月９日から発掘調査を開始し、10月３日に終了した。その後、火災で破損した礎石や凝灰岩への保存処理を行い、埋め戻しが完了したのは平成14年１月31日である。

第１表　調査経過

１月９日	調査区設定。表土除去。
１月15日	作業員による発掘作業開始。
３月12日	土坑ＳＫ8101より明治鎮壇具出土。
３月27日	土坑ＳＫ8102より大正鎮壇具出土。
３月28日	土坑ＳＫ8104より大正鎮壇具出土。 明治鎮壇具・大正鎮壇具２個をあける（貫首）。
４月19日	凝灰岩地覆石ＳＸ7975を検出。
４月23日	ＳＢ8100の花崗岩地覆石を外す（中造園）。
５月１日	須弥壇上の土坑ＳＫ8115精査・和同開珎出土。
５月17日	土坑ＳＫ8064検出・掘り下げ。焼けた飾り金具出土。
５月18日	土坑ＳＫ8060～8063、瓦暗渠ＳＸ8090検出。
６月13日	土坑ＳＫ8105より大正鎮壇具出土。
６月14日	調査成果についての記者発表。
６月17日	現地説明会。見学者約2000名。
６月22日	間柱柱穴ＳＫ7961～7964検出。
６月26日	土坑ＳＫ8103より大正鎮壇具出土。実測作業開始。
６月29日	礎石ＳＸ8120据付埋土上層より水晶玉・真珠出土。
７月５・９日	土坑ＳＫ8115より金延金出土。
７月12日	クレーンによる全景撮影。
７月18日	土坑ＳＫ8125より水晶玉出土。
７月19日	地上全景撮影。
７月25日	南北面階段掘り下げ開始。
７月27日	東面階段掘り下げ開始。
８月８日	基壇上断割開始。
８月30日	地上全景撮影。
９月３日	調査指導委員会。
９月12日	須弥壇断割開始。
９月19日	溝状遺構ＳＸ7994・7995検出。
10月３日	現場引き渡し。



第１図　発掘調査位置図（１：1500）

2　中金堂の歴史

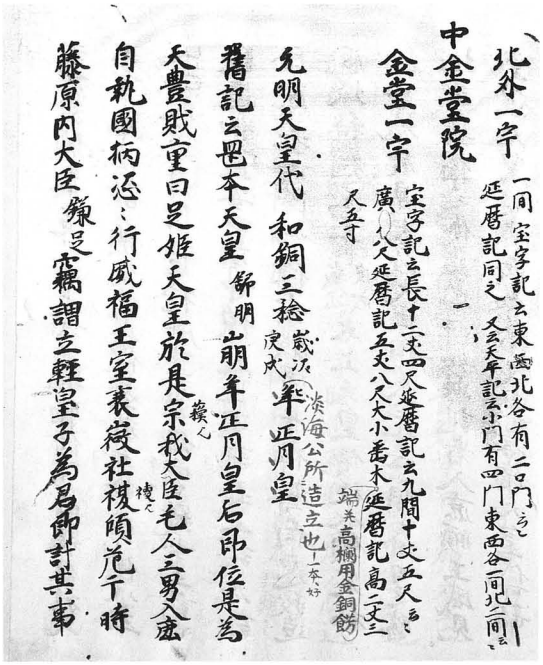
（1）中金堂の創建

『興福寺流記』(以下『流記』と称する）によれば、興福寺は、藤原鎌足の妻の鏡女王が、鎌足の病気平癒を願い建立した山階寺を濫觴とし、都の移転に伴い飛鳥に遷り厩坂寺と号し、平城遷都に及んで現在の地に遷り興福寺と号したものである。しかし、山階寺・厩坂寺ともに、『日本書紀』には見えない。また『続日本紀』（以下『続紀』と称する）には、四大寺と呼ばれる大安寺・薬師寺・元興寺・興福寺のうち、興福寺以外の三寺ついては、若干の問題も含むものの、飛鳥・藤原地域からの移転の記載があるのに対し、興福寺の創建についての記載はない。『続紀』養老4(720)年10月丙申条に「始置二養民・造器及造興福寺仏殿三司一。」とあるのが正史における興福寺の初見である。したがって、『流記』の信憑性と、『続紀』との整合が問題となる。なお、『流記』には中金堂そのものの創建については記載がないが、中金堂の記載に上記の興福寺の縁起をかけることから、中金堂の創建＝興福寺の創建と考えて差し支えない。

まず、『流記』の信憑性について。『流記』は平安時代後期成立だが、「天平記」「宝字記」「延暦記」等の年号を冠した各時代の資財帳を引用し、その史料的性格は「資財帳の集大成」といえる（渋谷和貴子「『興福寺流記』について」『仏教芸術』160、1985）ので、『流記』の資財帳からの引用には信頼を置くことができる。前述の興福寺の由緒と創建は資財帳からの引用部分であり、奈良時代に、興福寺が山階寺・厩坂寺と移転してきた起源を持ち、平城遷都間もない時期に創建された、とされていたことは確かである。氏族寺院で正史に記載されるものはほとんどないことからしても、『流記』の述べる由緒は信頼できるであろう。

また、寺格や寺号に関連して、川原寺（弘福寺）とのつながりを見いだす見解（加藤優「興福寺と伝戒師招請」関晃先生古希記念会編『律令国家の構造』吉川弘文館、1989）も魅力的である。

創建の時期について、「仏殿」は通常金堂をさすとし、『続紀』の「造興福寺仏殿司」を中金堂造営官司とみ、中金堂造営をこの時期まで遅らせる見解がある（藪中五百樹「奈良時代に於ける興福寺の造営と瓦」『南都仏教』64、1990）。『流記』の中金堂の記載には霊亀～養老年間成立とされる「旧記」の他、「宝字記」「弘仁記」の三書が引かれ、いずれにも養老年間については言及が無く、和銅年間の創建を語ることなどから、史料上は遷都直後の和銅年間創建とする、通説の妥当性が高いといえよう。


北外一宇　一間　宝字記云東西北各有二口門云々
延暦記同之　又云天平記云小門有四門東西各二間北二間云々
中金堂院
金堂一宇　宝字記云長十二丈四尺延暦記云九間十丈五尺云々
廣八丈延暦記五丈八尺大小舎木延暦記高二丈三尺五寸
端美高欄用金銅餝
元明天皇代　和銅三癸酉歳次庚戌　淡海公所造立也一本云
舊記云巳本天皇　舒明　崩年正月皇后即位是為
天豊財重日足姫天皇　於是宗我大臣毛人三男入鹿
自執國柄恣行威福王室衰微社稷傾危于時
藤原内大臣鎌足竊謂立輕皇子為君而計其事

第２図　『興福寺流記』中金堂部分（興福寺蔵）

（2）中金堂の被災と再建

興福寺中金堂院は、七度の火災に遭い、その度に再建されてきた(『興福寺　第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅰ』および第２表参照)。最初の被災である永承元年の火災と再建は、初めての再建で、かつ摂関政治衰退にともない、摂関家が藤原氏の精神的・信仰的支柱で

ある氏寺・興福寺を優遇するようになる時期と重なったこともあり、大規模な再建が行われた。当時の人々にも印象が強かったようで、再建工事のエピソードが『今昔物語集』に、春日社に奉じた願文が『朝野群載』におさめられている。再建の具体的な様子は『造興福寺記』に記載がある。『造興福寺記』永承三年三月一日条に、再建供養のための舞台舗設の記事があるが、その場所について「当二仏面間一。立二礼盤二脚一。〈去レ壇一許丈。〉去二礼盤一南二許丈。構二立舞台一。〈南北四丈八尺。東西三丈八尺。在二檻并南北階一。各凡去二金堂砌三尺一。前十日木工寮所二結構一也。〉」とあり、基壇から約一丈の場所に礼盤があり、そこからさらに南に二丈の場所に舞台があり、舞台から三尺の所に「金堂砌（みぎり）」があったことが知られる。「金堂砌」は、基壇から二丈七尺（約８ｍ）もしくは三丈三尺（約10ｍ）にあったことになる。「砌」は通常雨落溝をさすと考えられるが、このように離れた雨落溝は考えがたい。そこで注目されるのが、前回の調査で確認した前庭部石敷ＳＸ7550の南端の見切石である。見切石の基壇からの距離は約８ｍで、「金堂砌」とよく一致する。このことから、ＳＸ7550は永承再建の際にはすでに存在していたことが明らかである。

第２表　中金堂焼亡表

被災	再建供養
永承元年（1046）12月24日	永承３年（1048）３月２日
康平３年（1060）５月４日	治暦３年（1067）２月25日
嘉保３年（1096）９月25日	康和５年（1103）７月25日
治承４年（1180）12月28日	建久５年（1194）９月22日
建治３年（1277）７月26日	正安２年（1300）12月５日
嘉暦２年（1327）３月12日	応永６年（1399）３月11日
享保２年（1717）正月４日	文政２年（1819）９月25日

その後、嘉保３年の火災後の再建時に讃岐国から基壇外装用の凝灰岩を取り寄せており、（『後二条師通記』承徳３年３月３日条）、これは同時期に京都でもしばしば用いられた「白色凝灰岩」であろう。確実にこの時期まで、基壇外装は凝灰岩切石を用いた壇正積であった（遠藤亮氏の御教示による）。

一般に興福寺は再建の際に旧規をよく伝えるが、中金堂についても同様で、平家の南都焼討後の再建時も、東大寺が中国からの新手法を取り入れたのに対し、興福寺は旧来の形態を守ったとみられ、室町時代再建の中金堂も古代的な形態を良く伝えている。ただし享保の火災の後、文政の再建の際には財政難などから、一回り小さい仮金堂の建設が行われた。近世の興福寺で注目されるのは南円堂の観音信仰で、現在境内に立つ石灯籠が、多く近世の銘を持ち、かついずれも南円堂への参道の石灯籠として立ち、中金堂を正面としていないことは、中金堂とともに被災した南円堂の復興が素早かったことと相俟って、信仰の形態を表し興味深い。

（３）廃仏毀釈と復興

明治維新に際し、興福寺は全山復飾を願い出し、僧侶は春日社の宮司となった。明治５年に廃寺・寺地は官有地・さらに公園地となった。廃仏毀釈の時勢の中、塀や子院は破却され、主要な堂舎も学校や役所に転用され、中金堂も中教院等に転用された。転用時の改造で床が張られ、明治７年に床張りの障害になる須弥壇が取り壊された。この取り壊し工事の時に奈良時代の鎮壇具が出土し、国の所有となって現在東京国立博物館に蔵されている。その後明治14年に興福寺寺号復活が認められ、中金堂の仏堂への復興工事が行われた。こうした工事中の明治17年に、再び鎮壇具が出土し、興福寺に所蔵されている。

寺号復活時には敷地は公園地のままとされたが、後に返却された。ただし、塀等が破壊されているため、区画施設が乏しく、奈良公園と一体の状況である。破壊を免れた堂舎は、解体修理等を経ながら維持され、中金堂も基壇や須弥壇の改修が行われた。南円堂の観音信仰は今日に至るまで盛んである。

3　中金堂の建築

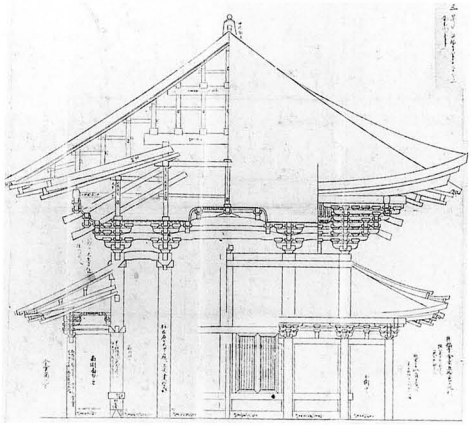
創建期　創建期中金堂は『流記』によってその平面規模が知られる。「宝字記」に「長十二丈四尺」と記される一方、「延暦記」には桁行が「九間十丈五尺」、梁行が「五丈八尺」と記され混乱があるが、これらの寸法は現存する中金堂遺構の裳階を含めた桁行全長、廂の桁行・梁行にそれぞれよく合致することから、桁行七間105尺、梁行58尺の主屋の四周に裳階が廻り、桁行全長が九間124尺となることを意味するものと解される。南都の大寺の金堂として、規模、形式ともに最も整った代表的な建築といえる。平面柱間寸法は大岡實が礎石の地表観察に基づき復原を試みている（大岡『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966年）。桁行は身舎中央三間各16尺、両端間14尺、廂14尺、裳階10尺、梁行は身舎二間各15尺、廂14尺、裳階10尺とされているが、身舎、廂の主屋部桁行全長が104尺となり、「延暦記」の寸尺と合致しないという問題がある。

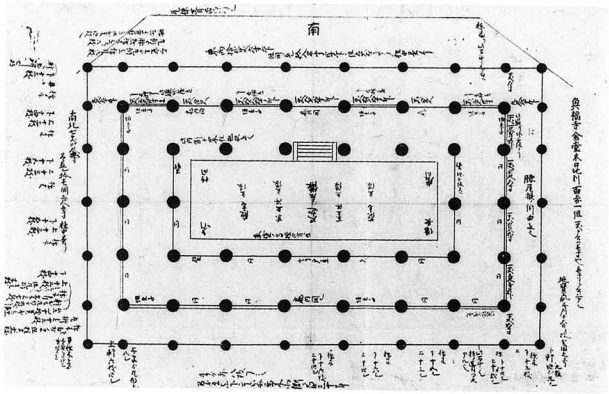
平安時代の再建　最初の火災となった永承大火後の再建建物については『今昔物語集』巻第十二第廿一に、再建供養に際して仏師定朝が天蓋を吊るための部材３本を入れ忘れた逸話が記されている。この部材は中央間の「編入」および「梁」の上に、それらと直交して入れられるとされており、身舎上方の構造として、この再建の直後に同じく藤原頼通によって建設された平等院鳳凰堂身舎同様、大虹梁上に天井桁を置き、組入天井とする形式が想定される。

康和再建建物については『七大寺巡礼私記』（保延６（1140）年）に「金堂一宇五間四面、瓦葺、南向、有重閣、有戸、三間、四面有廻廊」と記載されている。「重閣」の語は二重、裳階付きのいずれの場合にも用いられるが、奈良時代同様、五間四面の主屋の四周に裳階が取り付く形式だったと考えられる。また、この時期の興福寺の堂宇の基壇と仏像を描いたとされる「興福寺曼荼羅」（京都国立博物館蔵）では、中金堂の壇の周囲に高欄が廻り、正面に幅の狭い階段が取り付いている。

鎌倉初期の再建　治承の南都焼討ちの後、東大寺が新しい造営組織と大仏様という新技法の導入によって復興されたのに対し、興福寺は現存する北円堂、三重塔にみられるよう、古代以来の造営組織により、伝統的な形式を踏襲して再建された。「春日社寺曼荼羅」（個人蔵、鎌倉時代）に描かれる中金堂は、桁行七間寄棟造の主屋の四周に吹き放しの裳階がとりつき、南面階段は身舎に対応する幅となっている。

室町再建　嘉暦焼失後再建の中金堂については、『肝要絵図類聚鈔』所収の「中金堂院図」や『興福寺建築諸図』（東京国立博物館蔵）など比較的多くの史料が残されている。後者の絵図のうち中金堂の平面図、梁行断面図は、春日大工によって享保焼失前の延宝年間に実測図として作成されたもので、建築





第３図　室町再建の中金堂（左：梁行断面図、右：平面図（南が上）、東京国立博物館蔵『興福寺建築諸図』所収）

形態が詳しく判明する（第３図）。平面は前身建物同様、五間四面の主屋の四周に裳階を廻す。主屋は現存する東金堂（応永再建）同様、側柱と入側柱を同高とする形式で、瓦葺寄棟の大屋根をかける。その軒先は、裳階屋根よりも外へ出ており、図面より軒の出を測ると、約23尺と破格である。この極端に深い軒を支持するため、組物は尾垂木を二重に入れた四手先とし、両尾垂木の尻を入側柱筋まで引き込んでいる。この構造形式は現存する喜光寺本堂と類似する。裳階は四周吹き放しで、主屋側柱筋には四周に連子窓を入れ、南面中央間およびその左右一間ずつおいた間の計三間と、北面中央間を内開きの扉とする。主屋入側柱筋は北・東・西の三面を壁とし、北面中央間をくぐり戸とする。須弥壇は身舎いっぱいに置かれ、南面に一間幅の階段が付く。基壇南面の階段は、身舎桁行に対応する五間幅である。

なおこの図面では、裳階の出が平と妻とで異なる振れ隅となり、また廂の梁行寸法が、背面側13尺３寸５分に対し、正面側は11尺２寸５分と記され、梁行断面図でも正面側の廂の梁行が狭く描かれている。これは回廊棟通りに中金堂主屋南側柱筋を揃え、回廊棟通りの壁を中金堂東南隅側柱まで延長するための仕事とみられるが、現存する中金堂の側柱礎石心から柱位置が大きくずれ、しかも主屋屋根の傾斜が南面と北面とで異なるなど、構造的に特殊なおさまりとなる。

江戸再建　以上のように、中金堂の建築は基本的に創建時の形式を踏襲し続けた。享保火災後にも再建計画が立てられ、詳細にわたる中金堂案の図面が残されているが（木興修三家蔵「興福寺金堂弐拾分之図」）、幕府の許可がおりず不実施に終わった。再建は火災から100年余りを経た文政２（1819）年に至り、平面規模を裳階分縮小し、旧身舎部分を主屋にあてて寄棟屋根をかけ、旧廂部分を裳階とする「金堂仮殿」として実現された。仮堂とはいえ、寄棟造裳階付きの形態は往時のイメージを継承したものといえる。明治５年の壬申宝物検査時の写真では、階段は三間幅で、基壇外装は石垣となっていた。

明治維新に際し興福寺の寺院処遇が廃止されると、中金堂も官没され、中教院などに転用された。その際、須弥壇を削り、内部全面にわたり礎石から約75cmの高さに床を張り、一部に天井を設け、いくつかの小部屋を設けるなど、大幅な改造が施された。その後、明治14年２月、興福寺再興復号が許可されると、中金堂も寺に返還され、復旧が施された。変転を経ながらもこの堂は180年の長きにわたり建ち続け、「赤堂」と呼び親しまれるようになったが、第Ⅰ期境内整備事業計画の一環として、平成12年、惜しまれつつ解体された。

第４図　文政再建興福寺中金堂（平成12年解体）

4　遺　　構

4－1　中　金　堂（ＳＢ8000）

中金堂は発掘調査の成果からは４期の変遷が認められ、絵図なども参考にすると、５期の変遷が確認される。Ⅰ期（創建期）、Ⅱ期（奈良・平安時代）、Ⅲ期（中世）、Ⅳ期（近世後期）、Ⅴ期（廃仏毀釈以降）である。

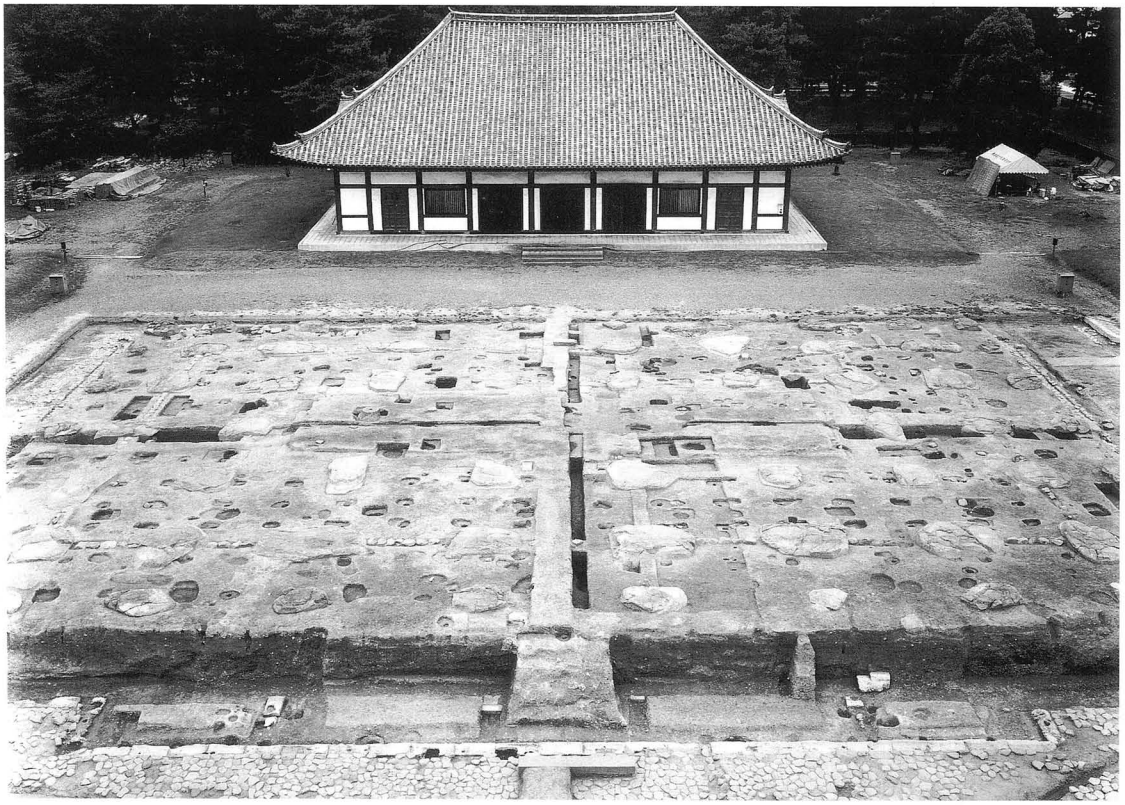
（1）基　　壇

興福寺中金堂は、若草山西麓から西へ伸びる春日野台地の西端部に位置する。調査前の中金堂周辺の標高は95.8ｍである。周辺の西・南は現状で崖状に落ち込み、北は緩やかに下がる。これまでの調査で、中門付近から東北方向にのびる谷地形等が確認されている。中金堂は、大阪層群の一部で、砂礫を含む明黄色粘土からなる独立小丘陵上にある。基壇は、この地山を削り出し、平坦にならした上に厚さ50㎝ほどの版築を施して形成される。版築は、薄緑色の粘土と、橙色のやや粗い土とを互層にして基壇全体に均一に堅く突き固める。基壇外側では標高95.2ｍ、基壇上では96.6ｍで地山面を確認した。基壇高は、中央付近の版築最上面と、周囲の玉石敷き雨落溝ＳＤ8050底で比高差約1.8ｍである。

平面規模は、検出した基壇外装の外側で、Ⅰ期は東西40.28ｍ・南北27.11ｍ、Ⅱ期は東西40.93ｍ・南北27.73ｍ、Ⅴ期では東西40.93ｍ・南北27.52ｍである。

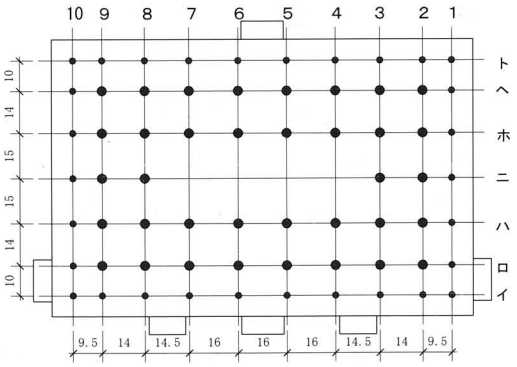
（2）建　　物

中金堂ＳＢ8000は五間×二間の身舎四周に庇・裳階がつく九間×六間の礎石建物である。Ⅳ・Ⅴ期は、裳階部分を除いた一回り小さい建物ＳＢ8100となる。ＳＢ8000の各柱間は今回の調査所見から第６図の通りになる。基準尺長は、側柱筋で１尺≒0.295ｍ。礎石は66基すべて現存し、64基が花崗岩系、２基が



第５図　調査区全景（南より）

安山岩である。礎石上面にはいずれも焼痕をとどめ、建物の外側ほど痛みが激しい。便宜上、東南隅を基点とし、西側に１～10、北側にイ～トと番付をした（第６図）。



第６図　礎石番付・柱間寸法図（単位：尺）

入側柱・側柱礎石　身舎入側柱・廂側柱では、削り出した地山面から約40cmの版築を施し、そこから約90cm掘り下げる。30cmほどの根石を置き、その上に礎石を据える。礎石を据えてからさらに基壇全体に版築を施す（第23図）。礎石の外形は一定でないが、入側柱礎石ニ－８で東西1.8ｍ・南北1.3ｍ・厚さ0.9ｍ、側柱礎石ニ－９で東西2.2ｍ・南北1.4ｍ・厚さ1.1ｍである。入側柱・側柱の礎石はいずれも創建期のもので、原位置を保つ。火災や、再建の際の加工により、損傷を受けているが、多くの礎石で円型柱座・地覆座の痕跡が確認される。柱座痕跡直径は入側柱礎石で約1.2ｍ程度、側柱礎石で約1.4ｍ程度、地覆座痕跡は幅約0.6ｍ程度である。焼痕の差が直線状に連続する部分があるが、側柱礎石では柱が乗る部分にも通る（第７図）。

裳階柱礎石　礎石ニ－10で東西1.6ｍ・南北1.2ｍ、厚さは推定0.4ｍである。礎石の据付掘形は、後述する足場穴より新しい（イ－４・へ－２）。柱座を有する礎石では、柱座が柱筋にのらないとみられる場合もある（ロ－１）。ただし、現在の裳階柱礎石から大きくずれた据付掘形は検出されていない。なお、安山岩製の２基（ト－３・８）は、上面に十字などの刻みを有し、据付掘形検出面は調査前の敷石裏込の直下で、据付埋土も他の礎石と異なる暗黒色の締まりの悪い土であり、後代の据え直しが確実である（第７図）。

壁ＳＡ7940　側柱筋にまわり、Ｉ期の玉石の壁地覆根石列ＳＸ7941を伴う。ＳＸ7941の石の大きさは約30cm、据付掘形は幅80cm・深さ20cm。裳階部分には柱間装置の遺構はなく、吹き放しだったと考えられる。

第７図　礎石（左：ロ－５・６、東より　右：へ－２・ト－２、北より）

足場ＳＳ7948　一辺約70cmのほぼ方形の掘形を持つ柱穴が、東西９列・南北６列に並ぶ。須弥壇ＳＸ7950の積土の下にも広がることから、Ｉ期建物を建てるための足場である。建物全体に関わる足場穴で検出したのは１組である。掘形の一つからは奈良時代の土器片が出土した。

落込状遺構　基壇の東壁で３基、北壁で１基、西壁で３基、南壁で１基観察された（ＳＸ7925～7932）。入側柱・側柱礎石据付と同じ面から掘込み、ＳＸ7926では深さ1.1ｍをはかる。ＳＸ7925は基壇縁から80cm程度で収まるが、ＳＸ7930は礎石据付掘形と連続して溝状の様相を呈する。埋土は突き固められる。またＳＸ7932を断ち割った際に基壇版築土の下の地山面で柱穴ＳＸ7998と東西溝ＳＤ7999南肩を検出した。

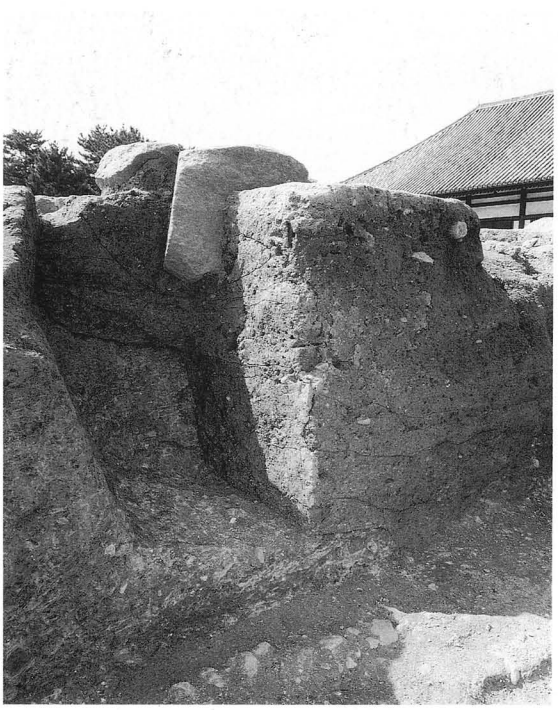
（３）須 弥 壇

Ｉ～IV期須弥壇ＳＸ7950は、東西約21ｍ・南北約7.5ｍで、基壇上に土を積んで形成される。南面中央に階段ＳＸ7951がつく。黒色土と黄褐色土の２層からなる。上層の黒色土中からは、銹着し孔に紐が残る和同開珎や、奈良時代の土器片が出土した。明治７年に削られ、本来の高さは不明であるが、ＳＸ7951から80cm以上と推定される。

Ｉ期須弥壇外装　凝灰岩製で、地覆石ＳＸ7952・7953、地覆石抜取痕跡ＳＸ7954～7957からなる。礎石ハ－４～７の段状加工痕跡や焼痕と列をなす。ハ－５ではＳＸ7951にともなう痕跡がＬ字状に南に延びる。北入側柱礎石では明瞭な加工痕跡・焼痕は確認できないが、ホ－７などでは平坦面を作り出す。

足場ＳＳ7969　黄褐色土上面から掘込まれ、黒色土で覆われる柱穴が、東西９列・南北３列並ぶ。ＳＸ7950上にのみ分布し、ＳＳ7948とは別の足場である。身舎の荘厳のための足場であろう。

壁ＳＡ7958　身舎の南面を除く三方向に回る。IIまたはIII期に、北面中央を除く柱間中央に掘立柱の間柱ＳＸ7959～7966が建つ。間柱据付掘形は1.4ｍ×0.8ｍの長方形で、長辺を柱筋に直交させる。ＳＸ7961で深さ1.8ｍ。柱抜取痕跡直径は約50cmで、壁は強く焼けている。壁地覆石列ＳＸ7967は、ＳＡ7958の凝灰岩製の地覆石で、幅25cmほどである。



第８図　ＳＸ7926（南東より）

第９図　須弥壇全景（西より）

（４）基壇外装

Ⅰ期基壇外装　凝灰岩製で、階段積土下で地覆石ＳＸ7971～7975、Ⅱ期以降の階段積土下で抜取痕跡ＳＸ7976～7978を検出した。ＳＸ7971・7972・7973・7975では、階段積土の中はそれら１石のみで、さらに奥に石列は続かない。北階段部分のＳＸ7972では長さ70cm・奥行き27cm・高さ46cmであり、階段外側から24cm分の基壇側の上面幅８cmを深さ８cmほど切り欠き、羽目石の仕口とする。他の地覆石もほぼ同じ大きさで、羽目石を載せる加工が施される。地覆石の抜取のレベルはＳＸ7978で95.3ｍ、地覆石の下端もＳＸ7975で約95.3ｍ、天端は95.62ｍである。Ⅰ期凝灰岩地覆石はいずれもほとんど風化しておらず、良好な状態であった。

Ⅱ期基壇外装　凝灰岩製で、一石が長さ105cm・奥行40cm・厚さ17cmほどの延石列ＳＸ7981～7985からなる。東西辺では残存状況が悪いが、南面西半では完全に遺存する。延石はいずれも基壇側10cm程度平坦面が残り、外側はえぐれる。天端は約95.3ｍであり、Ⅰ期地覆石の天端より30～40cmほど低い。なおＳＸ7981～7985は、地覆石の可能性もある。また、南側中央付近基壇縁の凝灰岩は、葛石痕跡とみられ（ＳＸ7945・7946）、Ⅰ・Ⅱ期基壇外装は凝灰岩切石を用いた壇正積である。

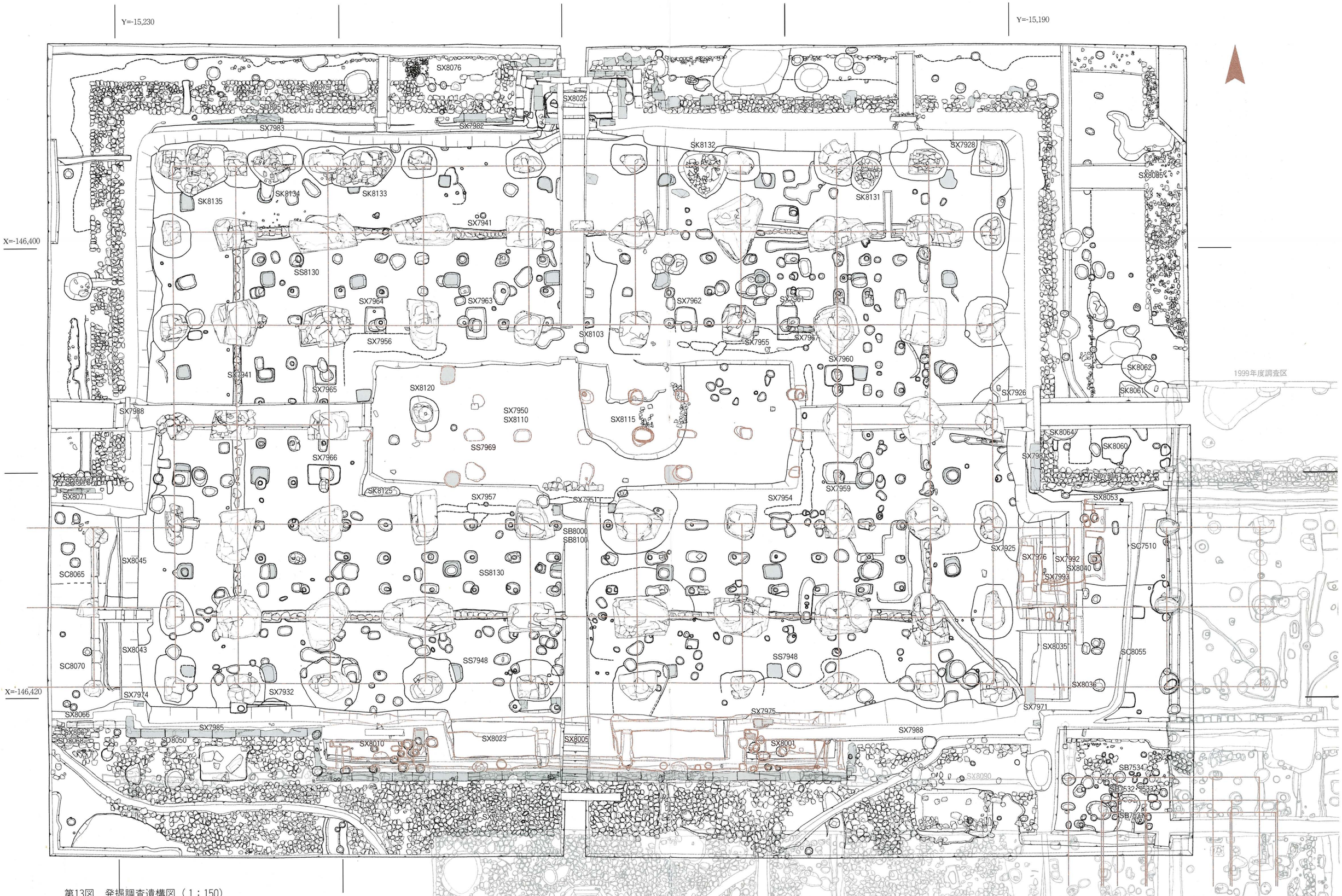
Ⅲ期以降の基壇外装　Ⅲ期基壇外装の遺構は検出していない。古図や東金堂基壇の所見から、花崗岩の壇正積であろうと想定される。Ⅳ期基壇外装は石垣ＳＸ7987で、ＳＸ8035の北入隅部などで確認した。Ⅴ期の花崗岩壇正積基壇外装ＳＸ7988の地覆石は、奥行きは35cmでほぼ共通するが、厚さ・長さは不揃いである。花崗岩割石を根石とし、漆喰を詰め据え付ける。羽目石は、コンクリートで地覆石に固定されていた。

（５）南面階段

Ⅰ期南面階段　身舎中央間および東西端の間にそれぞれ一間幅の階段が計３基つく（ＳＸ8001・ＳＸ8005・8010）。階段幅は地覆石の外側で4.15ｍで、ＳＢ8000中央一間分よりもやや狭い。３基共同じ幅である。階段の出は約1.8ｍと推定される。ＳＸ8005は階段積土下半が、ＳＸ8001は、基底部と、基壇に

第10図　ＳＸ7972（北より）
第11図　ＳＸ7963（北より）

第12図　須弥壇南側の様子
（ＳＳ7969・ＳＳ7848・礎石ハ－５他）



第13図　発掘調査遺構図（1：150）

接する部分の積土が、ＳＸ8010は基底部の積土が残存する。明黄褐色土を主体として互層で突き固め積土とする。外装は凝灰岩製。ＳＸ8005の東西にある南北地覆石列ＳＸ8006・8007は、大きさが不揃いな長方形の材を、外面を合わせて横長に並べる。ＳＸ8001西側南北地覆石ＳＸ8002も同様だが、ＳＸ8010東側南北地覆石ＳＸ8011は長方形の石材を南北に用いる。これらの凝灰岩は、ほとんど風化していない。階段地覆石の厚みは15cm、天端は95.32ｍほどで、基壇本体地覆石の天端より30cmほど低い。ＳＸ8005の東西の地覆抜取痕跡ＳＸ8008・8009は深さ17cmほどであるのに対し、検出面が同じ基壇地覆抜取痕跡ＳＸ7977・7978は深さ５cmと浅く、据付レベルも異なる。

II期南面階段　　Ｉ期の階段の間に積土を施し、通しの五間幅階段ＳＸ8020に改造する。改造時にＩ期階段の外装を外し、改めて凝灰岩の外装を施しなおす。凝灰岩地覆石列（ＳＸ8021）は一石の長さ約100cmで、それ以外の大きさ・形態・レベルなどは基壇本体のII期延石と一致する。幅は24.2ｍで身舎正面の幅とほぼ一致し、出は1.95ｍ。ＳＸ8020に改造する際、新たに積まれた積土は、円礫・凝灰岩片を含む暗褐色土を主体とし、この土からは奈良時代の土器のみが出土した。

IV・Ｖ期南面階段　　五間幅階段をＳＢ8100建設時に建物規模の縮小にあわせて切り縮めた三間幅階段ＳＸ8023である。近代に積土を足し、外装を整える。調査前の状況で階段幅13.6ｍ、階段の出は2.8ｍであった。

（６）北面階段

北面階段は、時期により大きさに多少の差があるものの、全期間を通して一間幅である。

Ｉ期北面階段ＳＸ8025は、幅4.15ｍで、出は1.85ｍ。外装は凝灰岩製。ＳＸ8025の地覆石列ＳＸ8026・8027は、厚さ15cmほどで外面をそろえるが、長さ・奥行きは不揃いである。天端は95.42ｍで、ＳＸ7972・7973より約30cm低く、南面階段のＳＸ8007などの天端とほぼ同じレベルである。基壇本体地覆石より出の部分の地覆石が低い状態等、Ｉ期南面階段と共通する。

II期北面階段ＳＸ8028は、幅5.6ｍで、出は1.85ｍである。ＳＸ8028の地覆石列ＳＸ8029は、厚さ20cm

第14図　基壇南面の様子（左：ＳＸ7985他、西より　右：ＳＸ8001、南より）

ほどの凝灰岩を用いる。外面は、後述する玉石の雨落溝ＳＤ8051にそろう。東西辺の地覆石の多くは、花崗岩に据え変えられ、据え変えられた部分はＳＤ8051にそろわない。

Ｖ期北面階段ＳＸ8031は、幅5.4ｍ、出は1.9ｍである。

（７）東・西面階段

Ｉ期東面階段ＳＸ8035は、出は約1.2ｍと推定される。掘込地業を伴う。掘込地業の幅は約５ｍで、ＳＢ8000の裳階部分の一間分、ＳＣ8055に対応する。南半の断割部分で、ＳＸ8035地覆石または踏み石とみられる凝灰岩（ＳＸ8036）を確認した。

II期東面階段ＳＸ8040は、出は約1.2ｍ程である。ＳＸ8035北側に積土をして拡張する。幅約8.4ｍで、ＳＢ8000の裳階柱筋から入側柱までの２間分、ＳＣ7510の回廊幅に対応する。改造の時期は南面階段の改造に先行する可能性もある。なお、「宝字記」の記載の検討からは、奈良時代後半の回廊は複廊と考えられる。

Ｖ期東面階段ＳＸ8041は、9.7ｍ、出は2.0ｍである。

西面階段でも、大きく２時期の変遷（ＳＸ8043・8045）と掘込地業を確認した。この変化はＳＸ8035・8040にそれぞれ対応する。Ｖ期の西面階段ＳＸ8046も東面階段同様である。

（８）雨 落 溝

基壇周囲にII期の玉石の雨落溝ＳＤ8050・8051がまわる。南側のＳＤ8050は幅40cm、深さ10cm。20cm程度の玉石を２列に並べ底石とする。北側のＳＤ8051は、幅60cm、深さ10cmで、20cm程度の玉石を３列に並べ底石とする。外側は玉石の側石を立てる。いずれも基壇側は、II期基壇延石を、側石に兼用する。ＳＤ8051はＳＸ8027にもまわるが、ＳＸ8020の周囲には雨落溝がない。

III期には、ＳＸ8075の上に厚さ12cmほどの凝灰岩切石がのる。中門の調査でも確認した雨葛と考えら

第15図　東面階段北半部分（東より）

れる。遺存状態が悪く、北階段周辺を中心に中金堂北側で何カ所か確認したが、南面では一切検出できなかった。

（９）廃仏毀釈以降の遺構

須弥壇ＳＸ8110　ＳＸ7950上に、明治17年に積み直された須弥壇。東西20ｍ・南北６ｍ・高さ１ｍ。外装は明治時代には石垣、のちに花崗岩の壇正積に改造される。

土坑ＳＫ8115　ＳＸ7950東半、黒色土から掘込む皿状の土坑。板ガラスなど近代の遺物が出土し、かつＳＸ8110に覆われるので、時期は明治７～17年である。明治７年の須弥壇削平は床張りのためで、この部分を掘下げる必然性はなく、明治７年鎮壇具出土時に掘られたものであろう。金延金・コハク玉破片・和同開珎破片などが出土した。ＳＸ7950中央部及び西半については断割調査の他、金属探知器で調査を行ったが、土坑状の落込や金属反応はなかった。

礎石ＳＸ8120　ＳＸ7950西半に位置し上面に直径60cmの円形の平坦面を作り出す。石材は安山岩。上部平坦面に直径約12cmくぼみおよび十字状の刻線をもつが、刻線は正方位から約20度ふれる。黒色土から深さ70cmほどの据付が掘込まれ、破砕した花崗岩を根石状にかませて据える。据付掘形からは近代に下る遺物が出土し、石が据えられたのは須弥壇が削られた明治７年から、積み直された17年までの間である。礎石西側中央付近の据付埋土最上層から、大量の水晶玉・真珠がまとまって出土した（第16図）。上面中央に一辺約30cm、高さ約45cmの角柱石材をすえ、その上に一辺約45cmの正方形の石材をのせていた（第16図）。これらは須弥壇築成時に埋まるが、最上部の石材はＳＸ8110の上面に出て、ＳＢ8100で後補の支柱状の柱の礎石となっていた。

土坑ＳＫ8125　ＳＸ8110南西角、地覆裏込のすぐ内側で、ＳＸ7950黒色土から掘込む。径15cm・深さ５cmほどの小土坑。水晶丸玉や辻玉が出土した（第35図）。

その他の廃仏毀釈以降の遺構　床束ＳＳ8130はＳＢ8100に床を張った際の床束である。廃棄土坑ＳＫ8131～8135は、北側の裳階部分に造られ、花崗岩片、近世・近代の瓦・土器類が出土した。

第16図　廃仏毀釈以降の遺構
（左：ＳＸ8120水晶玉等出土状況　右上：ＳＸ8120断面、北より　右下：金延金出土状況）

廃仏毀釈後の鎮壇具埋納坑　須弥壇ＳＸ8110上および基壇上で、中央とそれを東西南北に囲む、明治から大正にかけての鎮壇具埋納坑５基を検出した（ＳＸ8101～8105）。

ＳＸ8101　須弥壇中央で検出した東西100cm・南北105cm・深さ97cmの土坑。底面に水瓶形の容器を納めた木箱を据える。木箱は、厚さ２cmの板材をもちい釘留めにした縦横17cm・高さ30cm以上のもので、上蓋はすでに破損していた（第17図）。

水瓶形容器は、金銅製で総高25.5cm。いわゆる仙盞形水瓶（軍持）を模したものであろう。本体は長卵形の胴部と径2.9cm、高さ4.7cmの円筒形の頸部、および裾径8.4cmの低い高台からなる。頸部には印籠蓋をかぶせ、頂面中央に注口（尖台）にあたる高さ３cmの中実の丸棒がつく。この棒の付け根と頸部中程、および高台の上辺を起点に４方向に組紐がかけられていた（第18図）。胴部側面には４行にわたり「興福寺中金堂鎮／明治十七歳十二月十日／謹修當寺住職／園部忍慶敬白」との銘文が刻まれている。清水寺住職であった園部忍慶は、明治14年９月より兼務住職に任じられており、同16年の中金堂返還後、18年１月の本尊他安置仏の奉安、21年４月の還仏会にむかう時期の鎮壇であることがうかがえる。なお、Ｘ線撮影によって、容器内には玉類などが納められていることが判明した。

ＳＸ8102　須弥壇中央から東に2.2ｍの地点で検出した鎮壇具埋納坑。東西31cm・南北47cm・深さ56cm。土坑底面に、箱形の容器を南北方向に納める（第19図）。

容器は、金銅製で経箱あるいは密教の用具などをおさめた戒体箱にみられる形制をとる。本体は、縦30.6cm、横14.8cm、総高15.3cm。下部には長辺４箇所、短辺２箇所の格狭間を透かした床脚を付す。蓋表と体側４面に唐草を線刻で表す。以下、４基の容器は同型式であり、いずれも内底面に金銅製の銘板を据える。ＳＸ8102では、銘板上中央に銀色を呈する小壺を置き周囲に４枚の銭貨を納める（第22図１）。小壺は、総高6.3cm、体部径8.6cmの薬壺形で、径5.7cmの蓋には山形で扁平なつまみをつける。体部は上下二段に花唐草と鳥文、蓋表には内区に鳥文と飛雲文、外区に花唐草を配し、地を魚子で埋める（第21図２）。小壺内には、銭貨11枚と真珠５粒が納められていた。

第17図　ＳＸ8101検出状況（北東から）

第18図　ＳＸ8101金銅製水瓶形容器

ＳＸ8104　須弥壇中央から西に2.4ｍの地点で検出した鎮壇具埋納坑。東西30cm・南北54cm・深さ68cm。土坑底面に、箱形の容器を南北方向に納める(第20図)。

容器の内部には、銘板上中央に合子を置き、周囲に95枚の銭貨を納める(第22図２)。合子は径3.6cm・高さ2.9cmで、蓋上面に文様を刻む。中に、垂飾形をした赤色の玉類を納めていた(第21図１)。

ＳＸ8105　須弥壇中央から南に1.6ｍの地点で検出した鎮壇具埋納坑。東西64cm・南北52cm・深さ83cm。土坑底面に、箱形の容器を東西方向に納める。

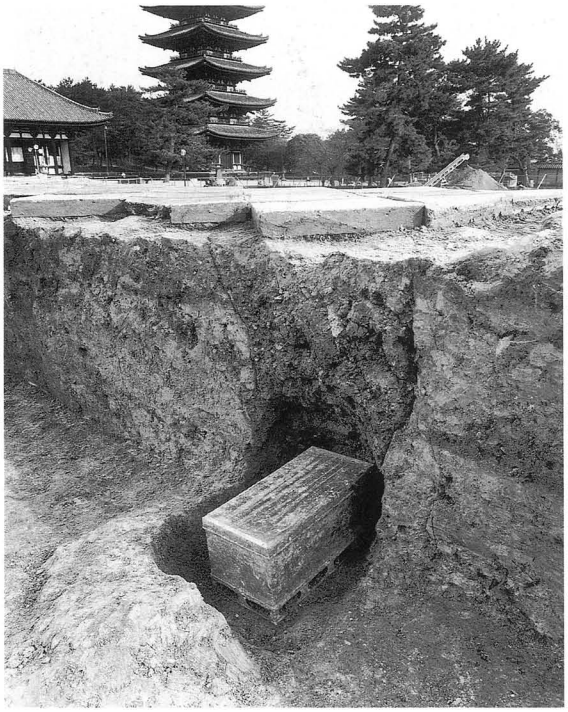
容器の内部には、銘板上中央に合子を置き周囲に緡銭５緡等を納める(第22図３)。合子は、ＳＸ8104のものと同形式で、径4.2cm・高さ3.1cm。中に垂飾形・勾玉形をした緑色・青色の玉類を納める。

ＳＸ8103　弥壇中央から北に2.5ｍの地点の基壇上で検出した鎮壇具埋納坑。東西58cm・南北43cm・深さ63cm。土坑底面に、箱形の容器を東西方向に納める。

容器の内部には、銘板上中央に金色を呈する小壺を納める(第21図３)。小壺はＳＸ8102のものと同形式で径8.8cm、総高6.3cm、蓋径6.2cmと体部の形態と蓋の径にわずかな違いがみられ、文様の細部にも差異がある。中には垂飾形・勾玉形をした黄色の玉類、金環、舎利容器が納められていた。

４基の容器内の銘板に刻まれた銘文は、東西容器が同文、北がほぼ同文で、南は前三者とは文・字体ともに異なるものである。東西容器銘板では、「興福寺金堂鎮壇銘竝序／大正五歳丙辰十月興福寺沙門良謙等／追遵先蹤虔修鎮壇曩明治」にはじまる銘文が、18行にわたり刻まれており、金堂修造にいたる経過が述べられている。ただし、年代を確認することのできた銭貨には、大正６年および同７年鋳造のものも含まれるため、実際の埋納がいつ行われたのかについては、さらに検討する必要がある。

小壺と合子は、明治40年に東大寺大仏殿須弥壇において発見された銀製鍍金狩猟文小壺、および水晶製合子を手本とした可能性が高い。また、上述のように玉類にはそれぞれの色彩に傾向性があり、小壺を含め、七宝としての金、銀、瑠璃、珊瑚、瑪瑙、真珠、琥珀に見合った、あるいは見立てたものであること、そしてこれらが埋納された方角にも儀軌上の意味を見いだしうる可能性がある。

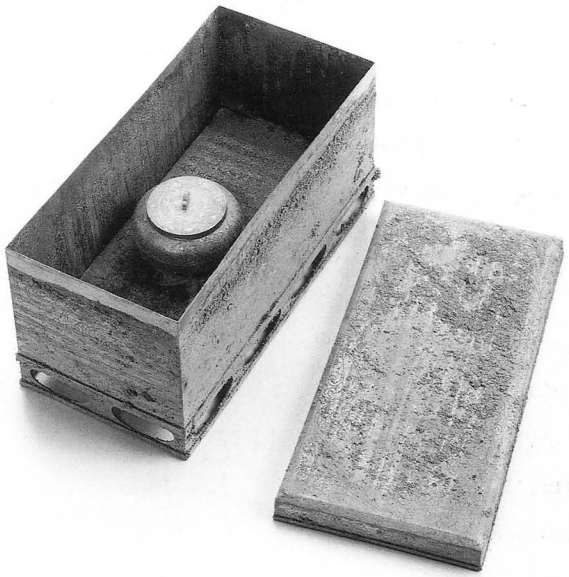


第19図　ＳＸ8102検出状況(北西より)

第20図　ＳＸ8104検出状況(北より)

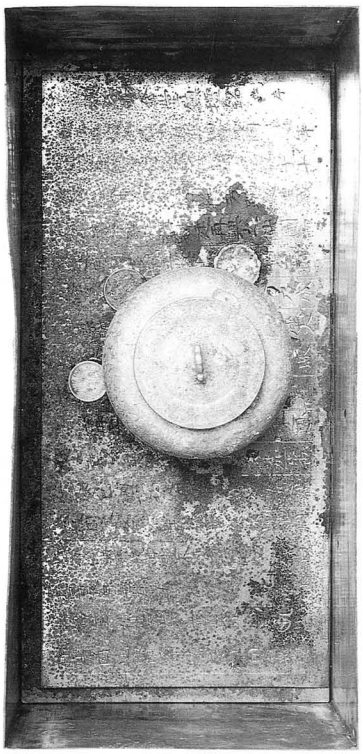
1

2



3

第21図　金銅製箱形容器と鎮壇具　1．ＳＸ8104合子　2．ＳＸ8102小壺　3．ＳＸ8103(上が西)

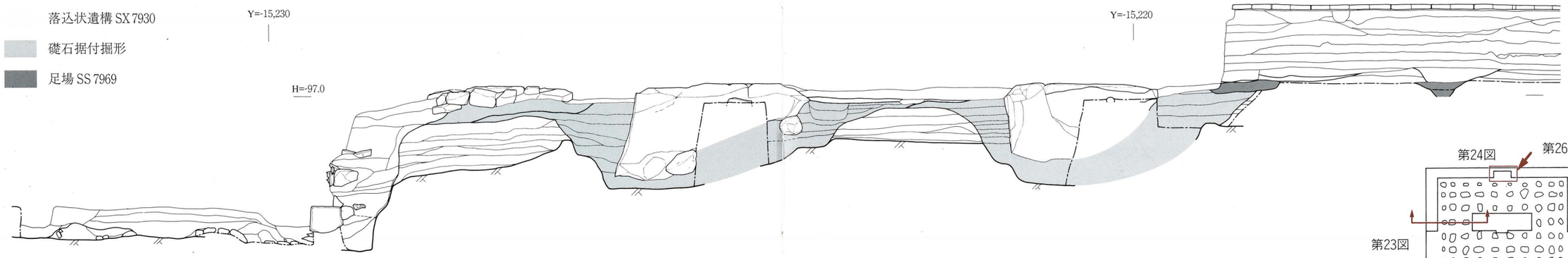


1

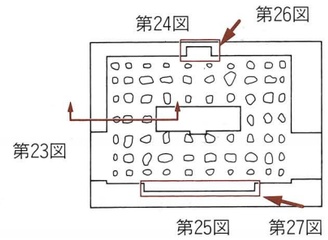
2

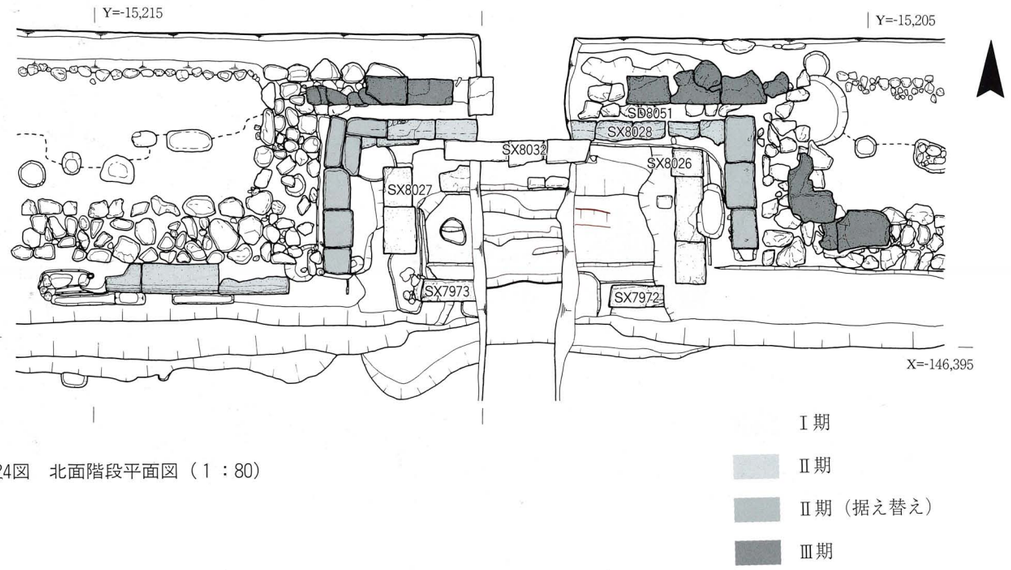
3

第22図　箱形容器とその内部　1．ＳＸ8102(上が北)　2．ＳＸ8104(上が北)　3．ＳＸ8105(上が東)



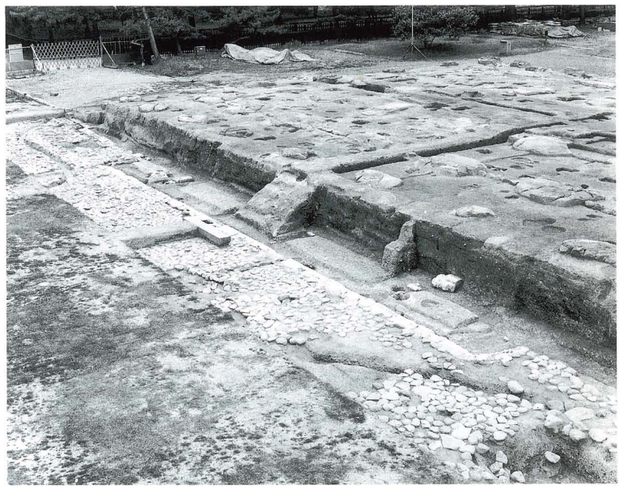
第23図　東西畔南断割北壁（1：50）



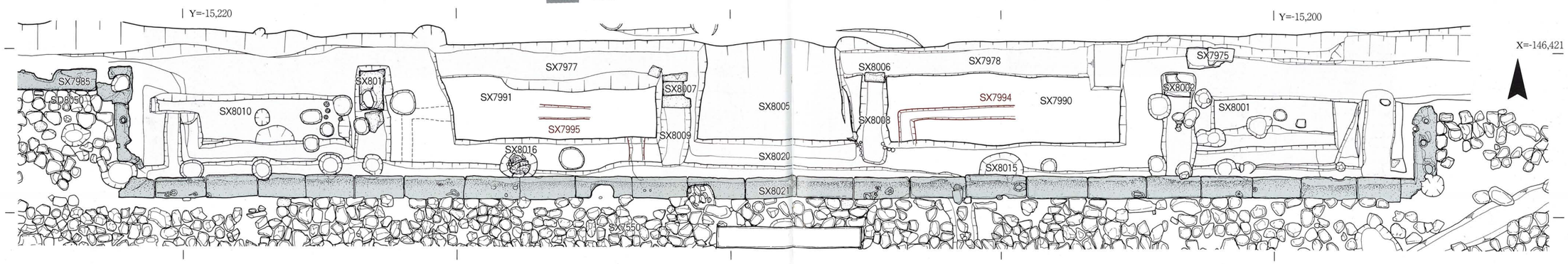


第24図　北面階段平面図（1：80）

第26図　北面階段（北東より）



第27図　南面階段（南東より）



第25図　南面階段平面図（1：80）

4－2　北 面 回 廊

北面東回廊ＳＣ7510　　複廊で、幅約10ｍ。２間分を確認した。基壇南半は地山削出しで、北半は積土である。地山削出しの幅はＳＸ8035と対応し、ＳＣ7510以前に単廊ＳＣ8055がある。北側に、凝灰岩の地覆石抜取痕跡ＳＸ8053、玉石の雨落溝ＳＤ7516がある。ＳＸ8053は前回の調査で検出したＳＸ7517と一連の溝である。ＳＤ7516は、幅40cm・深さ10cmで、両側に玉石の側石を立てる。ＳＤ8051につながっている。

北面西回廊ＳＣ8065　　複廊で、幅約10ｍ。約３ｍ分確認した。基壇の状況はＳＣ7510と同様で、ＳＣ8065以前に単廊ＳＣ8070がある。基壇南側には凝灰岩地覆石列ＳＸ8066があり、その外側に幅40cmの玉石敷犬走ＳＸ8067が通り、さらに外側に玉石の雨落溝ＳＤ8068がある。ＳＸ8066の石材の大きさは不揃いで、転用材である。ＳＤ8068は、ＳＤ8050と一直線状につながり、ＳＢ8000基壇南面とＳＣ8065基壇南面との差をＳＸ8067が埋めるような状況である。ＳＸ8067・ＳＤ8068ともに30cm程度の玉石を主体とするが、上面が平坦面でなく、敷き方も粗い。これら基壇南側の遺構は、ＳＤ8050などより時期が下がる。ＳＣ8065北側には、凝灰岩地覆石列ＳＸ8071、玉石雨落溝ＳＤ8072がある。ＳＸ8071の一石の大きさは長さ60cm・奥行40cmで、ＳＸ7982の石材と同質・同規模である。ＳＤ8072はＳＤ7516と同じ状況を示し、ＳＤ8051につながる。基壇北側の遺構はII期の遺構である。

4－3　中金堂周辺の遺構

（1）舗　　装

Ｉ期バラス敷ＳＸ7990～7992　　ＳＸ8020・8040によって埋められたバラス敷の舗装。ＳＸ7992は、ＳＸ8035側に玉石見切石列ＳＸ7993を伴い、ＳＸ8035・ＳＣ8055に対応する。バラスが認められるのは、中金堂基壇から３ｍほどまでの間である。またＳＸ7990・7991下層で、Ｉ期階段地覆石と平行な幅20cm・深さ５cmの溝状遺構ＳＸ7994・7995を検出した。バラス敷以前に一時期想定でき、犬走の縁石抜

第28図　基壇外周の様子（左：ＳＸ8075西北コーナー、南西より　右：ＳＸ8076見切石、北西より）

取または据付痕跡の可能性がある。なお、ＳＸ7990～7992のいずれにおいてもバラス上面で焼土は認められなかった。

II期玉石敷ＳＸ7550・8075　ＳＸ7550は、前回の調査でも検出した、中金堂基壇南面に広がる玉石敷。石の敷き方に幾分粗密があり、中央一間分で最も緻密に石を敷く。中央部分で何石かについて確認したところ、目地には焼土が入り込むが、裏側までは入らない。ＳＸ8075は、ＳＤ8051の外側に幅90cmでまわるテラス状の玉石敷。外側見切石を伴う。見切石は高さ約５cmほどである。

北側バラス敷ＳＸ8076　ＳＸ8075の外側に幅100cmほどでまわるバラス敷。外側に15cmほどの玉石による見切りを伴う。ＳＸ8075と同時期か、先行する。

東側玉石敷ＳＸ8085　調査区東北隅のＬ字型の玉石敷。幅1.6ｍ、両側に見切石を伴う。見切内部は敷き方も粗く、下層に焼土も観察された。ＳＸ8067に似る。

（２）その他遺構

埋甕遺構ＳＸ8015・8016　ＳＸ8005先端東西、階段から約2.5ｍにある。据付掘形は直径70cm・深さ25cmほどで、ＳＸ8016では甕も一部残存していた。推定復元径80cm以上の須恵器の甕である。南面階段がＳＸ8020に改造される際に壊される、Ｉ期の遺構である。

土坑ＳＫ8060～8064　ＳＣ7510北側に集中する土坑群。重複関係から、ＳＫ8060が最も古く、ＳＫ8064が最も新しい。ＳＫ8064は焼け土を含み、飾り金具なども出土した。

瓦暗渠ＳＸ8090　中金堂基壇南面に、基壇幅分東西にのびる。丸瓦を凸面を上にして伏せて並べる。東側は回廊雨落ちにつながる様相を呈するが、残りが悪く判断しがたい。西側は、中金堂基壇西端にそろえて南に折れる状況が確認された。瓦は中世。側柱からの距離約７ｍで、応永再建中金堂の軒の出とほぼ一致する。また、建物から同じような距離にある遺構として、西側の溝ＳＤ8091がある。III期の遺構である。

幄舎　前回の調査で検出したＳＢ7531・7532・7533・7534の隅柱などの柱跡を検出した。

第29図　ＳＸ8090（南東より）
第30図　ＳＫ8060～8064（南より）

第31図　ＳＸ8016（北西より）

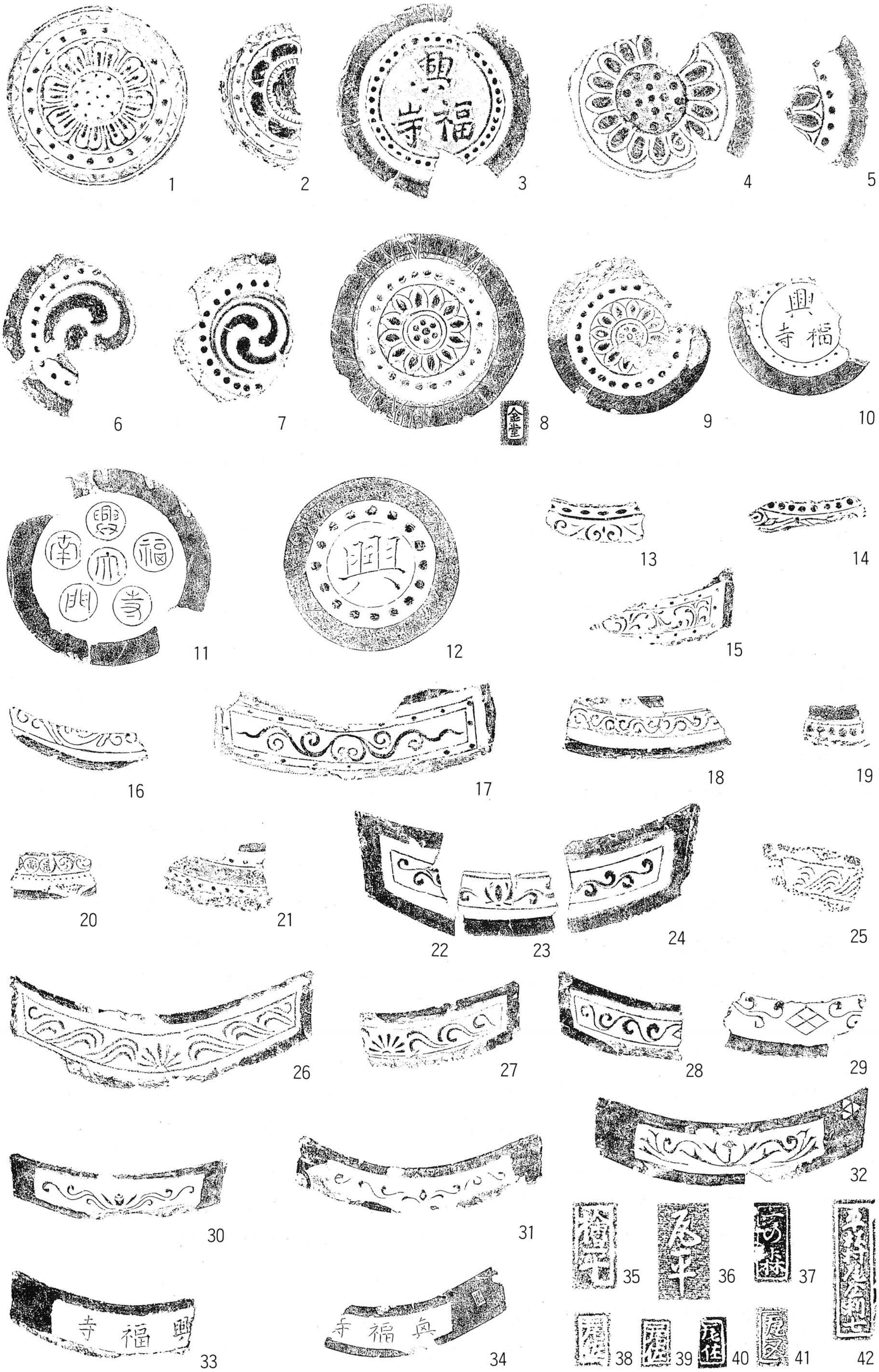
5　遺　　物

5－1　瓦（第32図）

今回の発掘調査では合計34567点の瓦が出土した。その内訳は軒丸瓦177点、軒平瓦300点、丸瓦9101点、平瓦24966点、鬼瓦７点、熨斗瓦16点、その他道具瓦32点である。出土した瓦の所属時期は、興福寺創建の奈良時代初頭から近代にまで至る。軒瓦でその割合をみると、奈良時代27点、平安時代43点、中世231点、近世160点、不明16点であり、奈良時代の瓦の出土数はきわめて少ない。

軒丸瓦　第32図-１は奈良時代初頭の興福寺創建期に位置づけられる、線鋸歯文縁複弁蓮華文の6301Ａ型式である。今回の調査で6301型式は14点出土し、そのうちＡ型式と判断できた資料は８点ある。２は平安時代に位置づけられる単弁９弁蓮華文軒丸瓦である。３は鎌倉時代後半の文字瓦（「興福寺」）であり、外区に38の珠文を配す。４・５と共に基壇東側の土坑SK8064から多量に出土した。４は単弁12弁の軒丸瓦で蓮子数は１＋４＋８である。５は４と近似するが、外区に珠文を配する。いずれも鎌倉時代末の資料である。出土状態、焼成、胎土などから、３は軒平瓦20と、４・５は軒平瓦22 ～ 24に組む可能性が高い。６・７は中世の左巻三巴文軒丸瓦である。６は外区に小型の珠文を配するが、圏線は認められない。巴頭は尖り、頭同士も比較的近接する。７は比較的大型の珠文、内圏線という文様構成を持ち、巴頭は丸みを帯びている。６に比べ７は後出の資料であろう。８と９は近世の単弁12弁蓮華文軒丸瓦である。８は外区に２５の珠文、内区に１＋６の蓮子を配し、丸瓦部凸面には「金堂」の刻印が認められる。９は瓦当面の文様構成は８に近似するが、焼成は良好でやや小型である。９は文政二(1819)年の中金堂再建に伴う資料と推定される。10は「興福寺」、11は「興福寺南大門」、12は大型の「興」一文字の文字瓦である。いずれも焼成は良好で、近世末以降の資料と考えられる。『興福寺菩提院大御堂復興工事報告書』では、11を幕末に企図された南大門再建用の瓦と推定している。

軒平瓦　13・14は興福寺創建期の軒平瓦である。13は均整唐草文の6671A型式で、遺存部分の上外区に杏仁形の珠文が観察される。本調査では３点が出土した。14は変形忍冬唐草文6645A型式で、LH26区瓦溜から２点出土した。15は6739A型式の均整唐草文軒平瓦で、所属時期は平城宮瓦編年Ⅳ期後半である。16・17は平安時代後半の均整唐草文の軒平瓦である。17は大型資料で、上下左右の外区には珠文を配する。同笵の資料が合計４点出土しているが、いずれも調整は粗い。18～21は鎌倉時代の軒平瓦である。18は均整唐草文軒平瓦である。顎部には凹型台圧痕があり、瓦当裏面にタテケズリが観察されることから13世紀の資料と推定した。19は連珠文軒平瓦である。20は均整唐草文軒瓦で、瓦当中心に逆字体「興福寺」が配される。SK8064を中心に多く出土した。18と同様の製作技術上の特徴が認められ、13世紀に位置づけた。軒丸瓦３と組む可能性が高い。21は正字体「興福寺」文字瓦であり、外区に珠文を配する。22～24は大型の蓮華唐草文軒平瓦であり、鎌倉時代末に位置づけられる。軒丸瓦４～６に組む可能性が高い。25～29は室町時代の軒平瓦である。25～27は波状文の、28・29は唐草文の軒平瓦であり、中心飾りは26・27は半裁菊花、28・29は菱形である。26は東金堂に同笵例がある。30・31は宝珠均整唐草文の、32は橘均整唐草文の軒平瓦である。前者は近世初頭に、後者は17世紀末に位置づけられる。33・34は近世末以降の文字瓦である。いずれも「興福寺」の文字を配し、後者には「瓦佐」の刻印も観察される。近世末以降の資料には、「瓦佐」(38～40)以外にも「檜平」(35)、「瓦平」(36)、「一の森」(37)、「瓦又」(41)、「平松村瓦屋利七」(42)と刻印された資料が多くある。なお近世末以降の瓦は、安村健氏と藪中五百樹氏からのご教示を得た。



第32図　出土瓦（1～34　1：6，35～42　1：2）

5—2　土器・陶磁器

調査区からは、整理用コンテナにして31箱分が出土した。時代的には古墳時代（5世紀後半）の須恵器杯Hを最古として、奈良時代から近・現代に至るあらゆる時代の土器・陶磁器がある。その中でも、近世や近・現代の陶磁器類が出土量の大半を占めているが、ここでは主に中金堂の創建やその後の再建と係る遺構や堆積土層から出土した奈良・平安時代の土器についてふれる。

奈良時代の土器　出土量は極めて少量でかつ小片が多い。なかには図化をためらわれるものもあるが、共伴土器の中に確実に平安時代に降る資料は含まれていないことから、中金堂創建の時期や基壇周辺の整備時期を示す資料として重要である（第33図）。土師器には、杯A、杯B蓋、皿A（23）、皿C（21・22）、椀A（20）、盤、甕がある。皿Cはいずれも灯火器として使用された油煙の痕跡を口縁部に残している。須恵器には杯A（25）、杯B（26）・同蓋、高杯、壺、壺E（24）、小型平瓶、甕、甕C（27）などがある。20・23は須弥壇積土、21・24・26は南面五間階段積土、25は単廊時東階段積土、22は基壇南面外周バラス敷、27は創建期基壇の南面地覆石抜取跡から出土したものである。また、基壇土積土、廂柱間の地覆石据付穴、創建時足場穴、南面中央階段斜前方にある土器据付け穴SX8016からも、各々奈良時代の須恵器が出土した。SX8016に埋められていた須恵器甕は現存高27cmで、旧地表面と同じ高さになるが、本来の最大径（現存最大径56cm）まで至っていない。もともと最大径80cmを越える須恵器大甕の上半部を打欠いて底部近くのみを利用したものであろう。

平安時代の土器　SA7958の間柱の各柱抜取跡のうち、SX7965とSX7962の柱抜取跡からの出土土器は、比較的まとまった様相を示している。SX7965柱抜取跡出土土器は土師器の皿類のみである。これらの土師器は火災による火熱は受けておらず、灯火器として使用された油煙の痕跡を口縁部に残すものが多い。法量からは大・中・小の区分も可能であるが、ここでは製作手法や形態から三類に分けた。A類皿は、やや丸みをおびた底部と外上方にひらく口縁部からなり、器壁を厚く作る。底部外面に指押えの痕跡、内底面に刷毛による調整痕、口縁部外面には強い二段ナデの痕跡が明瞭に残る。法量から大・小に区分され皿AI(16)は、口径15.8cm、器高2.9cm。皿AII（4）は口径12.2～12.7cm、器高1.8～2.5cm。このほかに、断面三角形の高台をつけた皿(3)がある。B類皿は平底状の底部と外方にのびる口縁部からなり、A類に比してやや深い器形となる。内底面の刷毛調整痕はなく、口縁部外面の二段ナデの痕跡も不明瞭である。大・小に区分され、皿BI(2)は口径16.3cm、器高3.5cm。皿BII(5)は、口径10.2～10.7cm、器高1.9cm～2.3cmあり、先の皿AIIよりさらに口径が小さくなっている。C類皿は、口縁部が屈曲し、口縁部を肥厚させたいわゆる「ての字状口縁」の小皿である。口径10cm前後で器壁が0.5cm前後の一群(6)と、口径が11.2cmで器壁が0.3cm前後の一群(7)があり、後者は時期的にやや先行するものであろう。SX7962柱抜取跡出土土器には、瓦器椀・小椀、土師器皿がある。瓦器椀には器壁が厚く内面のミガキの密なるものと、器壁が薄くミガキの粗いものがあることから、少なくとも11世紀から12世紀代の複数の型式が混在しているようである。瓦器小椀（12）は、口縁部内外面に粗いミガキ・内底面にらせん暗文を施したもので、高台の断面形は三角形となる。土師器は全て皿であり、製作手法は基本的に先のB類と共通する。皿BI(8)は、口縁部に二段ナデを施し、口縁端部を上方につまみあげる。口径14.2cm、器高2.7cm。皿BIIは、いずれも口縁部に二段ナデを施したもので、底部が丸底状になるもの(8)と平底のも(9)がある。口径9.9～10.4cm、器高1.4～2.0cm。このほかに皿AII類（11）が1点ある。口径12.4cm、器高1.9cm。

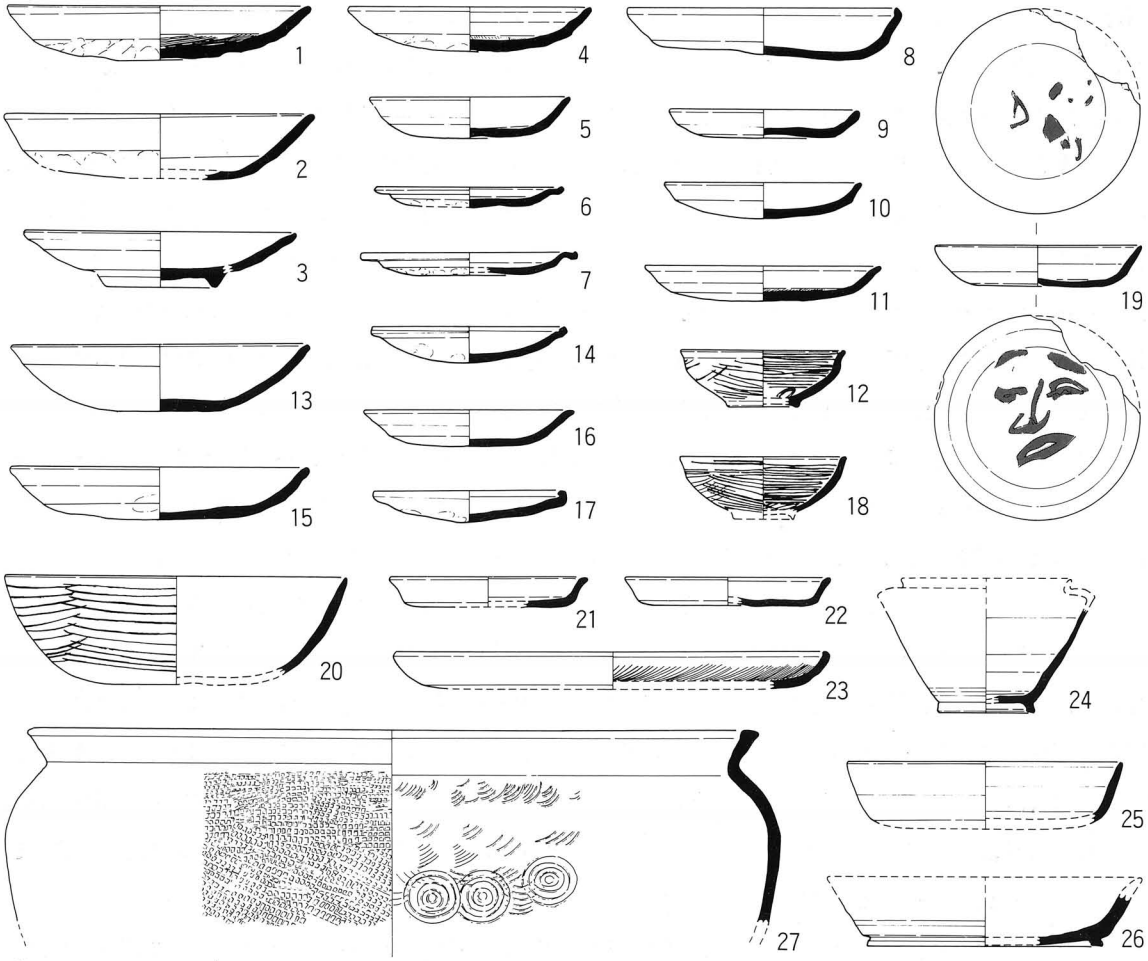
SA7958の他の柱抜取跡のうち、SX7960柱抜取跡からは瓦器小椀（18）、SX7963柱抜取跡からは土師器皿(13・14)、SX7966柱抜取跡からは瓦器小椀・土師皿が出土した。SX7960出土の瓦器小椀は、

内底面にジグザク状、口縁部の内外面に密なミガキを施したもので、先のＳＸ7962柱抜取跡出土小椀と比較して、型式的に先行するものである。

以上のように、ＳＡ7958間柱抜取出土土器は、基本的には灯火器に使用された土師器皿が主体となりながらも、その型式は単一ではない。これまでに知られている南都出土土器の年代観からすると、ＳＸ7965柱抜取跡出土の土器は11世紀中頃、ＳＸ7962柱抜取跡出土土器は11世紀中頃の土器を含みながらもそのほとんどの土器は12世紀後半と考えられる。これらの年代をあえて興福寺の被災の歴史と関連させるとすると、前者は永承元（1046）年ないし、康平３（1060）年の火災及び再建、後者は治承４（1180）年の火災及びその再建時期と関連するものであろう。ほかの柱抜取跡出土土器にも明らかに新旧二時期の土器が混在しており、間柱の使用法を考えるうえでも興味深い資料である。

土坑ＳＫ8062からは一括投棄された状態で土師器の皿が出土した。大小二種あり、大皿（15）は口縁部外面を強く二段ナデにし、口縁端部は丸く納めている。小皿には、端部を丸く納めるもの（16）、やや尖り気味に納めるもの、「ての字状口縁」のもの、内側に折り曲げるもの（17）といったように種々の形態が認められる。調整手法、口縁部の形態、法量等の点から、これらの土器の年代は先述のＳＸ7965柱抜取跡出土の土器に近い時期と考えられる。

そのほかの注目すべきものとして、二彩壺片、灰釉椀・壺片、白磁片や底部の内外面に人面を墨書した鎌倉時代の土師器皿（19）などがある。



第33図　出土土器（１：４，27　１：６）

5－3　金属製品・石製品・ガラス製品その他

今回の調査では、中金堂の創建以前から現在までの多種多様な遺物が出土した。ここでは、特徴的な遺構との関係でこれらの遺物の一部を紹介する。

(1)創建鎮壇具に関わる遺物　(巻頭図版参照)

中金堂の創建鎮壇具は、明治７・８年および17年に発見され、現在東京国立博物館(以下東博)および興福寺に所蔵されている。前述のように、須弥壇東半で検出した土坑ＳＫ8115が、鎮壇具発見に関わる遺構であると考えられたため、埋土を研究所に持ち帰り、水洗選別と微細遺物の検出をおこなうこととした。持ち帰った土量は、遺物収納用コンテナ約120箱におよぶ。ＳＫ8115埋土およびその周辺から出土した遺物には、明治期のものも含まれるが、従来から知られていた遺品との一致等から鎮壇具の一部とみられるものには、金延金、砂金、コハク玉、水晶玉、ガラス玉、和同開珎、銅椀片などがある。

金延金は２点あり、ともに幅7.6㎝前後の薄板を巻きたたんだもので、厚さと重さはそれぞれ0.12～0.17㎜、35.62ｇと、0.08～0.10㎜、34.02ｇ(第34図上･下)。東博所蔵の金延金９点は、いずれも帯金状に平らに延ばされたものであるが、幅が7.4～8.0㎝の間にあること、重さ35ｇのものが２点あることなど、今回出土したものとの類似点がある。これらも本来は巻きたたまれていた可能性を考慮する必要があろう。なお、同様に巻きこんだ金延金が豊浦寺金堂跡で出土している(『奈良県遺跡調査概報1994年度』)。飛鳥寺塔跡では、小さく折りたたんでおり、延金の埋納に二つの様式を知ることができる。砂金は６点を確認しているが、いずれも１㎝以下の不定形なもので、重さ0.03～1.09ｇ。コハク玉・水晶玉は、ともに径7.5～8.5㎜ほどの念珠玉である。ガラス玉には、緑色の小玉がある。

南階段のＶ期の積み土の中からも、鎮壇具の一部とみられるガラス玉、和同開珎が出土している。発見時の廃土が利用されたものであろう。ガラス玉は、平玉と呼ばれる碁石形のもので径14㎜、厚さ６㎜で緑色を呈する。同様の平玉は、東博所蔵の鎮壇具中に800点以上あり、濃緑・緑・緑黄・黄・黄褐・褐・濃褐色等の多彩なものが知られている。

第34図　ＳＫ8115および周辺出土金延金と砂金

第35図　ＳＫ8125水晶玉出土状況

また、こうした鎮壇具が再埋納された可能性のある遺構が２箇所で見つかっている。ＳＸ8120の掘形上層からは、真珠163点、水晶玉91点が出土した。水晶玉の内訳は、碁石状の平玉87点、丸玉３点、念珠玉１点である。

須弥壇南西隅のＳＫ8125からは、丸玉２点、平玉１点、辻玉１点、念珠玉１点が出土した(第35図)。丸玉は、径29㎜のものと24㎜のもの。辻玉は、径21㎜厚さ９㎜の円盤形を呈し、円の中央に１孔と側面から十字に孔をうがつ。

(2)土坑ＳＫ8064出土遺物(第36図)

基壇東側の北面回廊北部からは、焼け焦げた部材とともに、銅製飾金具、鉄製金具が出土した。銅製飾金具は、火熱を受けたためか、あるいは倒壊等による力のためか大きくひずんでいる。一辺17㎝のものと一辺15㎝のものの二種があり、ともに正方形を呈する。厚さ２㎜の銅板を切り透かし、円を中心に前者は上下左右に、後者は放射状に花文を配する。これらは、銹着した鉄釘のありかたから、金具自体に釘穴をもうけるのではなく、隅にある透かし部分を利用して部材に留められていたことがわかる。

鉄製金具には、座金具状のもの、半球形のものなどがある。

(3)壁ＳＡ7958出土遺物(第37図)

須弥壇の背後を囲む壁ＳＡ7958の間柱柱穴は、柱痕跡の周囲が火熱により赤化し、その中には多量の焼壁土、焼土、炭、および凝灰岩切石などが捨て込まれていた。これらに混じって複数の釘が出土した。穴により、釘の形式にまとまりがあること、また長さの異なるものが１本ずつセットをなしている場合のあること(第37図)など興味深い出土状況がみられる。

ＳＸ7961からは、基部断面が方形の切釘、折釘、方頭釘が出土した。これに対して、ＳＸ7963、ＳＸ7965、ＳＸ7966からは、巻頭で基部断面が長方形で扁平なものが出土している。巻頭の頂部は杏仁形を呈する。第37図上は、このうち最大のもので、長さ38㎝、基部上端の幅2.3㎝、厚さ1.3㎝、巻頭の横幅4.5㎝、重さ478.3ｇをはかる長大なものである。

第36図　ＳＫ8064出土銅製飾金具

第37図　ＳＡ7958出土鉄釘

6　結　　語

6－1　主要な調査成果

（1）創建時の様相を明らかにした

基壇規模は地覆石外周で東西約40.3m・南北約27.1m・高さ約1.8m。地山を削り出した上に50cm程の版築を施す。基壇外装は凝灰岩切石を用いた壇正積。建物規模は第6図の通りで、3章で指摘した従来の大岡説の問題点を解決した。基準尺長は1尺＝約0.295m。また柱径もある程度想定できるようになった。須弥壇は東西約21m・南北約7.5m。南面階段は一間幅階段が3基つく。東西面階段・回廊の中金堂取付部分は一間幅。外周の舗装は、バラス敷。なお、中金堂心座標は、X－146,407.78、Y－15,209.15である。

（2）変遷の状況を明らかにした

東西両面階段・回廊の金堂取付部分は、「宝字記」の記載から、天平宝字年間（757～765）までに複廊になる。奈良時代の間に、南面階段は五間幅の通し階段に、基壇外装に凝灰岩製の延石が使われ、玉石の雨落溝が作られ、外周の舗装は玉石敷、という改造が行われた。火災後の再建でも、平安時代にはこの形態が維持されるが、鎌倉時代には凝灰岩製の雨葛が用いられ、応永再建時には花崗岩切石の壇正積基壇外装となる。文政再建時には基壇外装は石垣に改造され、南面階段は三間幅に切り縮められる。

建物規模は基本的に創建期から踏襲されるが、応永再建中金堂では南面側柱筋が多少ずれる可能性がある。文政再建時には側柱までの規模で再建された。明治初頭には床が張られる。須弥壇は取り壊されるが、明治17年に石垣の外装で積み直され、その後大正以降にさらに積み足される。基壇外装・須弥壇外装も、花崗岩切石による壇正積に改造される。

（3）鎮壇具について一定の所見を得た

明治7年出土の鎮壇具は、須弥壇東半の土坑付近から出土したと考えられる。新たに出土した鎮壇具

第38図　礎石（ニ－9・8、西より）

第39図　基壇東側の様子（南より）

から、現在知られているよりさらに多くの鎮壇具が埋納されていたことが確認された。金延金が巻かれた状態で出土し、現在延ばされている東博蔵の金延金も巻かれていた可能性が高い。

6—2　考察と課題

（1）創建時の形態

創建期の興福寺中金堂は、正面階段は一間幅階段3基、東西に単廊がとりつき、基壇外装に延石はなく、周囲はバラス敷という、古い形態を色濃く残すものであった。基準尺長も奈良時代初頭にふさわしい数値である。これらから、中金堂建設は遷都からそう遠くない時期と考えられる。また、伽藍配置の形態についても再検討が必要であろう。

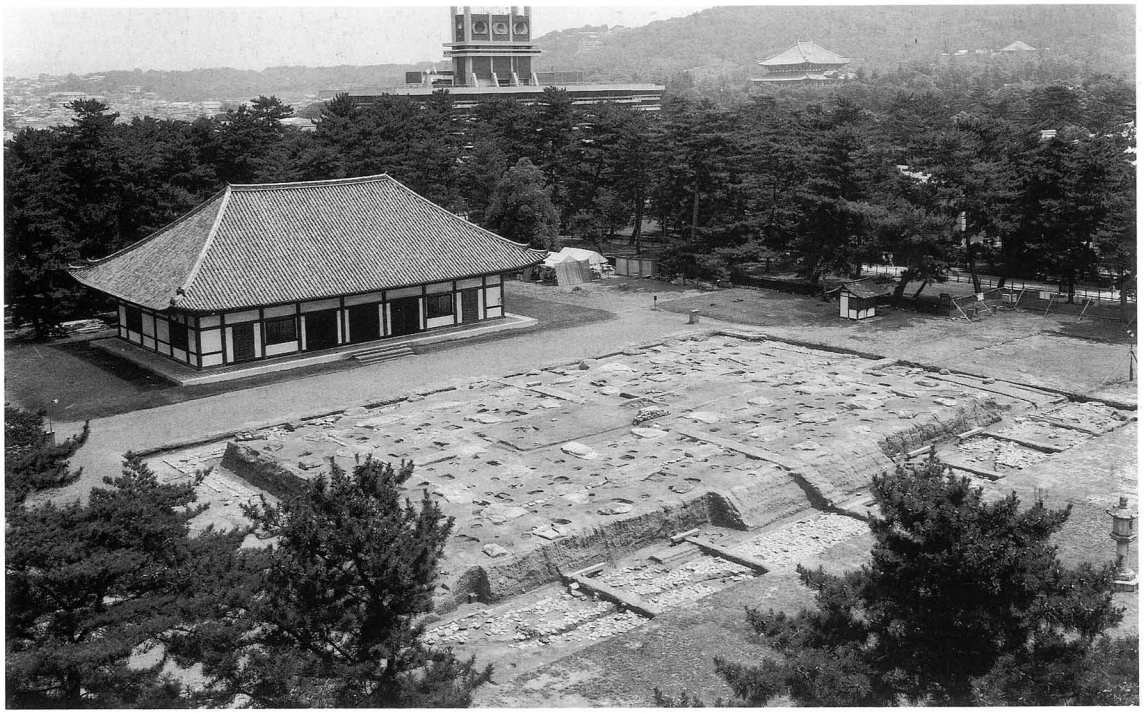
なお、裳階の隅木が柱筋に対し45°に出ない「振隅」となる可能性が高い。その意匠上の問題も含めて検討が必要である。

（2）改造について

奈良時代の間に、正面階段は五間幅の通し階段、回廊は複廊、基壇外装には延石・雨落溝を伴い、周囲は玉石敷の舗装という形態に改造された。飛鳥の形態を踏襲したような当初の計画から、平城京の寺院にふさわしいプランへの大改造が行われたと評価することができよう。ただし、その時期については、奈良時代中である以上細くは不明である。今後の回廊の調査の所見等も含めてのさらなる検討が必要である。

（3）興福寺と藤原氏

中金堂基壇が全体に地山を削り出していることが判明し、平城京を眼下に納める点も含めますますその立地条件の良さが浮き彫りになった。また、新たな鎮壇具の出土は、これまで知られる以上に多くの鎮壇具が埋納されていたことを示した。こうしたことは、興福寺造営を押し進めた力の大きさを如実に物語るといえよう。



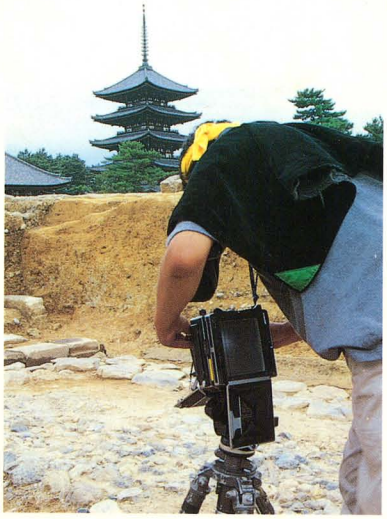
第40図　調査区全景と東大寺（南西より）

報告書抄録

ふ り が な	こうふくじ　だいいっきけいだいせいびじぎょうにともなうはっくつちょうさがいほうさん
書　　名	興福寺　第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報III
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	馬場基・金子裕之・川越俊一・次山淳・清水重敦・渡辺丈彦
編 集 機 関	独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所
所 在 地	〒630-8577　奈良県奈良市二条町２丁目９－１　Tel　0742-34-3931
発 行 者	興福寺
所 在 地	〒630-8213　奈良県奈良市登大路町48番地　Tel　0742-22-7755
発 行 年 月	西暦　2002年　３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯 °′″	東 経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
興福寺（こうふくじ）	奈良県奈良市（ならけんならし） 登大路町（のぼりおおじちょう）	29201	—	34度 40分 48秒	135度 51分 46秒	2001.1.9 ～ 2001.10.3	1,836	境内整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
興 福 寺	寺　院	奈良時代 ～ 明治時代	中金堂 回　廊 石　敷 廃棄土坑	鎮壇具 瓦 土　器 金属製品 銭　貨	中金堂・北面回廊・中金堂周辺部の創建期の形態・規模を明らかにし、その後の変遷も解明した。 創建鎮壇具の埋納場所を確認した。



2002年３月20日　印刷
2002年３月30日　発行

興　福　寺

第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅲ

編　集　独立行政法人文化財研究所
奈 良 文 化 財 研 究 所

発　行　興　福　寺
〒630-8213　奈良市登大路町48番地

印　刷　(有)関西プロセス